

令和7年度 多世代参画による 地域活力プラットフォーム構築調査事業 【資料集】

【目次】

| | |
|---|---|
| ＜参考1＞多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会の開催について..... | 1 |
| ＜参考2＞多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会開催実績..... | 3 |
| ＜参考3＞シンポジウム多世代参画で広がる地域の未来～「ごちゃませ」のつながりを通じて ～報告書～ | 4 |

＜参考1＞多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会の開催について

多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会の開催について

令和7年8月19日
政策統括官（共生・共助担当）決定
令和8年4月8日一部改正

1. 趣旨

我が国の高齢化が急速に進む中で、高齢社会対策大綱（令和6年9月13日閣議決定）を踏まえ、幅広い世代の参画の下、多様な主体の連携により、地域課題の解決に取り組むためのプラットフォームの構築や活用の促進を図るため、成果や課題等を整理・評価するとともに、関連施策の進捗状況等を把握し、今後の施策展開に資する検討を行う「多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会」（以下「検討会」という。）を開催する。

2. 構成員

- （1）検討会の構成員は、別紙のとおりとする。
- （2）検討会には、必要に応じ、構成員以外の者の出席を求めることができる。
- （3）検討会にはオブザーバーとして関係府省庁の同席を求めることができる。

3. 検討会の公開等

検討会は、原則として非公開とする。検討会終了後、議事の内容が分かる議事要旨を作成し、公表する。

4. 庶務

検討会の庶務は、政策統括官（共生・共助担当）付参事官（総合政策推進担当）において処理する。

5. その他

前各項に定めるもののほか、検討会の運営に関する事項その他必要な事項は、必要に応じて構成員と協議の上、政策統括官（共生・共助担当）が定める。

多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会
構成員

飯島 勝矢 東京大学 高齢社会総合研究機構 機構長
東京大学未来ビジョン研究センター 教授

檜山 敦 一橋大学大学院ソーシャル・データサイエンス研究科 教授
東京大学先端科学技術研究センター 特任教授

湯浅 誠 特定非営利活動法人全国こども食堂支援センター・
むすびえ公共政策アドバイザー

(参考) オブザーバー

内閣官房全世代型社会保障構築本部事務局

内閣官房地域未来戦略本部事務局

内閣府政策統括官（共生・共助担当）付参事官（共助社会づくり推進担当）

内閣府孤独・孤立対策推進室

総務省自治行政局市町村課

総務省地域力創造グループ地域振興室

厚生労働省社会・援護局地域福祉課

<参考2>多世代参画による地域社会の担い手確保に関する検討会開催実績

第1回：令和7年10月15日（水）10:00～11:30

議題：(1) 参画団体からの状況報告
(2) 意見交換
(3) 今後のスケジュールについて

第2回：令和7年12月10日（水）10:00～11:40

議題：(1) 参画団体からの状況報告
(2) 孤独・孤立対策推進室からの事例紹介
(3) 意見交換
(4) 今後のスケジュールについて

第3回：令和8年2月3日（火）10:00～11:30

議題：(1) 参画団体からの状況報告
(2) 意見交換
(3) 今後の予定について

＜参考3＞シンポジウム多世代参画で広がる地域の未来～「ごちゃまぜ」
のつながりを通じて～報告書～

シンポジウム
多世代参画で広がる地域の未来
～「ごちゃまぜ」のつながりを通じて～
報告書

開催日時 2026年03月04日 13:00～16:30
会場：紀尾井カンファレンス メインルームA、B、C、D

令和8年
主催：内閣府

| 時間 | 内容 | 詳細 |
|-------|-------------------------------|--|
| 12:30 | 入場開始 | |
| 13:00 | 開会挨拶・事業説明 | 水野 敦（内閣府政策統括官（共生・共助担当）） |
| 13:05 | 基調講演 | 檜山 敦（一橋大学ソーシャルデータサイエンス研究科教授・東京大学先端科学技術研究センター特任教授） 「多世代で学んで支える地域の未来～大学等を活用してできること～」 |
| 13:20 | 内閣府による来年度事業の説明 | 小池 智歌（内閣府事業説明：内閣府政策統括官（共生・共助担当）付高齢社会対策担当 企画官） |
| 13:30 | パネルディスカッション | ①今年度事業の活動報告（5団体）1団体5分間 ②パネルディスカッション ファシリテーター：湯浅 誠 （特定非営利活動法人全国こども食堂支援センター・むすびえ公共政策アドバイザー） テーマ：地域課題の解決に向けた仕組みづくり パネリスト： ・村山 洋史 （地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター） ・黒澤 史津乃 （一般社団法人横浜イノベーション推進機構） ・中村 順子 （特定非営利活動法人コミュニティ・サポートセンター神戸） ・光岡 眞理 （特定非営利活動法人介護予防で日本を元気にする会） ・大江 樹 （社会福祉法人三股町社会福祉協議会） |
| 15:00 | 休憩 | |
| 15:05 | 「多世代参画を生み出す仕掛けとは」～地域における取組紹介～ | 馬場 拓也（社会福祉法人愛川舜寿会 理事長） 貞松 徹（社会福祉法人ながよ光彩会 理事長） |
| 15:35 | 今年度の事業の総括と来年度への期待 | 飯島 勝矢（東京大学高齢社会総合研究機構 機構長 東京大学未来ビジョン研究センター教授） |
| 15:45 | 参加者による交流会 | |
| 16:30 | 終了 | |

開会挨拶

みずの あつし
水野 敦

内閣府政策統括官

内閣府政策統括官（共生・共助担当）水野 敦統括官



内閣府政策統括官の水野と申します。本日は、シンポジウム「多世代参画で広がる地域の未来～『ごちゃまぜ』のつながりを通じて～」にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。我が国において急速に高齢化が進展する中、政府は令和6年9月に高齢社会対策大綱を閣議決定いたしました。この大綱では、高齢社会対策を、今後高齢者の割合がこれまで以上に大きくなっていく社会を前提として、すべての世代の人々にとって持続可能な社会を築いていくための取組であると位置づけ、若年代から高齢世代までのすべての人々が、それぞれの状況に応じて、支える側にも、支えられる側にもなれる社会を目指しています。内閣府では、こうした問題意識を踏まえまして、新しい試みとして、幅広い世代の地域住民の参画のもと、地方公共団体、大学等、企業、団体、NPO等の多様な主体の連携によりまして、地域社会の課題解決に分野横断的に取り組むための仕組み、いわば「ごちゃまぜプラットフォーム」の構築を目指す実証事業を開始いたしました。本日は、事業の採択団体、実際に事業を推進しておられます5団体の皆さまや、事業の企画段階から、様々なご意見やご助言を賜ってきた飯島先生、檜山先生、湯浅先生にご参加いただいております。各地で展開した特色ある事業を通じて得られた成果や気づき、若者、現役世代の参加や、地域における様々な主体との連携を生み出す工夫や、今後の課題などについてご紹介、ご議論いただきます。その後、社会福祉法人の立場から特色ある取組を展開されている、神奈川県のアムール会の馬場理事長、長崎県のながよ光彩会の貞松理事長をお招きして、地域に開かれた多世代が集まるごちゃまぜの場を生み出す、様々な仕掛けなどについてお話しいただく予定にしております。こうしたディスカッションや事例紹介を通じて、地域に世代や分野の縦割りを超えた新たなつながりを生み出す仕組み作りの意義や可能性、今後の取組の方向性や実践のアイデアなどについて、それぞれ考えを深めていただくきっかけになれば幸いです。また、昨日より、来年度事業の公募を開始いたしました。来年度事業の説明の時間も設けてございますので、ご関心のある方々におかれまして

は、ぜひ応募をご検討いただければと思います。なお、シンポジウムの最後に、全国各地で同じような問題意識を持って活動されている皆さまが一堂に会するという貴重な機会を生かしまして、交流会の時間を、短時間ではございますが設けてございます。ぜひ、この交流会にもご参加いただき、今後の活動につながるネットワークの構築や情報交換の場としてご活用いただければと考えています。最後になりますが、本日のシンポジウムを通じて、皆さまが新しい発見や活動のヒントを得て、それぞれの地域での活動につなげていただくことを期待いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

基調講演

ひやま あつし
檜山 敦

一橋大学大学院ソーシャル・データサイエンス研究科教授

東京大学先端科学技術研究センター特任教授

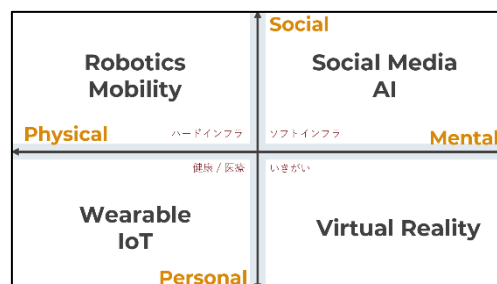


一橋大学、東京大学で教育研究に携わらせていただいております、多世代、色々な人たちの支えが地域を活性化していく、これからの未来を考えていくという、こちらの内閣府のテーマの中で、特に私が所属している大学という立場から、一体どういう、大学という地域の中の1つの組織を活用していくことができるのか、そういった参考にしていただけるような事例を紹介していきたいと思っております。

私のバックグラウンドなのですが、ロボットとかバーチャルリアリティというようなテクノロジーですね。情報科学的なテクノロジーの研究をやっている中で、そういった技術を高齢者や高齢社会を豊かにすることに役立てていくようなシステムの研究開発を、もう20年近くやってきております。

内容的には、人や社会をサポートするという視点でとらえていったときに、2つの軸があるという形で分けているんですけども、水平軸が物理的支援と心理的支援を表していて、垂直軸が、下のほうが個人に対する支援で、上のほうが社会やコミュニティに対する支援という分け方をとっています。左上から順番に、社会における物理的支援というところで、ハードウェア的なインフラを整備していくという意味で、テクノロジーとしてはロボット技術や移動支援のモビリティの技術ですね。左下の個人に対する物理的支援と、健康医療に関わる内容というところで、ウェアラブルやIoTのような技術が活用されていくと。右下の個人に対する心理的支援、高齢期の新しい生きがいを考えるという意味で、バーチャルリアリティを活用するやり方があるのではないだろうか。

そして本日のテーマにも、より関わってくるところなんですけども、社会における心理的支援、社会の中でのソフトウェア的なインフラを整備していくと。従来的には、法制度とか政



策みたいな話になるんですけど、テクノロジーの文脈でいうと、ソーシャルメディアやAIのような情報基盤ですね、こういったものを役立てていくことを考えております。実際にこれまで研究開発してきたシステムの写真や映像などをお見せしておりますけれども、例えば左上だと、行動範囲を拡張していくと。家にいながらにして、あたかも対面でコミュニケーションを取っているようなアバターロボットだったり。

左下のほうはこちら、バーチャルリアリティを活用して、オーラルフレイルですね、呼吸機能、嚥下機能を遊びながらトレーニングする、VR吹き矢みたいなものの社会実装をやっていたり、右下は、福祉施設で自由に外出できない高齢者の人たちが、バーチャルリアリティで思い出の場所、



行ってみたい場所を旅する、みんなと一緒に旅する。そういった体験を提供して、楽しみながら遊んでいたら、結果として、認知機能や運動機能が向上していくという、そういった仕組みを作っていくつもりです。右上のほうなんですけれども、情報基盤を活用していくことで、元気な高齢者の人たちが社会の中で活躍できるように、地域の活動と人をつなぐプラットフォームとしての、GBERというWebアプリケーションの研究開発と社会実装も進めてきております。コンセプトムービー、ちょっと最初に見ていただこうかなと思います。

※VTR視聴

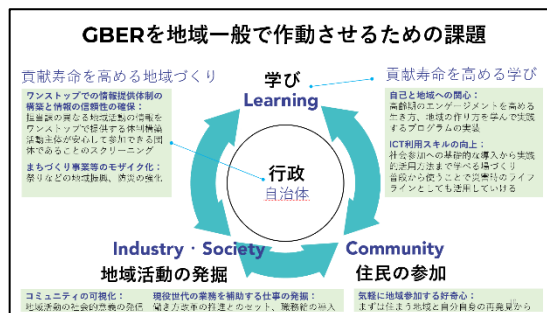
私たち1人の一生が、100年にわたる時代になってきていると言われておりますけれども、日本という社会を見ていたときに、人口ピラミッドがよく出てくると思いますが、1950年は凄くキレイなピラミッド形をしていました。これが100年かけて、きれいな逆三角形になり、もはや1人が1人を支える時代は確実に来ると。けれど実は65歳以上の9割ぐらいの方たちは、元気な人たちだったりする。その人たちも一緒に社会を支える全員参加型の社会を作れば、また安定した構造を見出せるのではないだろうか。こんなことを考えたところから始まっています。一人一人が地域の中で、何かしら課題として取り出されているようなものに興味を持ち、参加していき、自分自身の居場所を見つけていきながら、社会参加を進めていけるようにしていきたい。フルタイムで何かを頑張るといのは、現役のときからすると、もっとなんか融通無碍（むげ）に社会参加したいっていうニーズがあったりすると思う。一人一人の空いている時間とか、活動できる場所、やってみたいこと、できること、それを組み合わせて、1人では小さい力かも知れないけれども、みんなで1つのプロジェクトに向かって動いていけば、大きな地域を支える力に変わっていくかも知れない。こういうことを考えてGBERというプラットフォームの研究開発を進めております。こういうものがインフラとして浸透していくようになれば、特に高齢者コミュニティとか、情報から有事の際に切り離されたりしてしまう……みたいなことがあるかもしれないけれども、日常的に使えるものがあれば、情報のライフラインとしても機能させられるようになるのではないだろうか、このようなことを考えております。

こちらのプラットフォーム、いわゆるアルバイトのマッチングとは違う方向を目指しております。地域の中の様々な活動ですね。生涯学習、趣味の活動、ボランティア、もちろん仕事も含まれてくると思うんですけど、退職した人が地域の中でどんな活動を、どういう組織の中で行われているのか。自分自身は何ができて、どんなことに興味があるのか。そういうことを再発見していきながら、居場所を見つけていって、より深い地域との関わりを紡いでいくことをサポートしていきたいというふうに考えております。

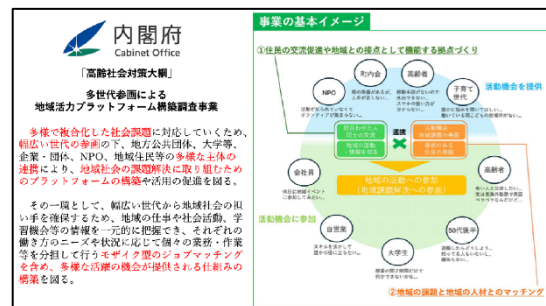
ムービーの中で、モザイク型のかたちで、色々な人の力を組み合わせるといってお話を申しておりましたが、1つは時間軸ですね。自分の空いてる時間で、できる範囲の社会参加をやってみましょう。地図検索機能を使って、生活圏内のできる、参加してみたい活動は何なのかを探したり、Q&Aのような機能を使って、自分自身が求めている社会参加の形とか、できること、やりたいことというもの、プロフィールの情報として集めていくようなことが、機能として用意されております。いくつかの地域で社会実装も進めてきておりまして、主に自治体と連携していく形での展開というものが中心になってきております。ただ、こういった仕組み、テクノロジーを、地域に持っていったら活用してもらえらるかという、そういう簡単な話ではないのが現実の社会で、行政なども連携していきながら、地域住民、そして地域の中で色々な活動を提供している団体の皆さんと、「地域参加をみんなで、地域のことを一緒に考えよう」というような、ムーブメントを起こしていくような関わり方を進めていきながら、新しいツールであるICTの活用にも慣れてもらうという働きかけですね。



こういうものをあわせてやっていかないといけない。そのための仕掛けとして、今、力を入れ始めているのが、デジタルな世界から、またアナログなりリアルな世界に戻ってくるというような感じで、Living Lab (リビング・ラボ) 作りというものを、大学の環境の中にやってきております。



Living Lab、どういうものかという、まさにこちらの内閣府の、多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業で言われているように、地域の中の様々な組織・団体、それから多様な住民というものが一緒に合わさって、力を合わせて展開して、地域課題を達成していくというものを目指しているような、そういう環境を地域の中に作っていくというようなものになっております。私のいる一橋大学では、手始めに私が担当する学部1年生向けの必修科目で、学生グループに、地域の団体の中に入り込んでフィールドワークをやってもらうということを課しております。5人グループぐらいの人たちが、10を超える地域の中で、様々な活動をやっている団体の中に入り込んでもらって、地域課題を考えて解決策を提言してもらうみたいなことをやってきております。



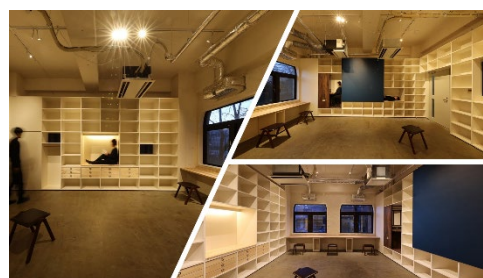
例えば、国立市のこどもの成長を支援するような拠点である矢川プラスと、周辺にある東京女子体育大学と一緒に、高齢者の健康作りプログラムを実装していくって、というようなところに関わったりだとか。市役所の健康作り活動にVRを組み合わせて、市役所の出張所のような場所で、VR吹き矢のワークショップを展開したりだとか。



あとは、フードロスのような社会課題に対して、地域の中でフードロスに取り組んでいるNPOさんと一緒になって、プロジェクトの提言というものを市長さんに持っていき……みたいなことなどやったりという感じで。成果を、大学の中の広い空間を使ってオープンに、地域の人たちも呼び込んで、成果発表のポスター発表会みたいなものやったりしてきたりするわけなんですけれども。こういうことをやっけていながら、色々な地域とのつながりを持ちつつ、学生だけじゃなくて、住民参加型のフィールドワークというものを広げていくことで、より地域の中での展開というものを、連続的に多様な人を巻き込みながらやっけていくのではないだろうか。



皆さん、地域の人たちを集めまして、「大学の中にLiving Labっていうリアルな空間も作りましょう」ということで。一緒に壁を塗ったり、ペンキ塗ったりとかして。デザインも、国立の中で活躍されているデザイナーさんや、メディアアーティストの方にも入ってもらって、こういった不思議な、一見研究室らしくない空間みたいなものを作り、「ここで一緒に、国立の中で地域作りに多世代で展開していくようなムーブメントを作っけていきたいと思います」ということで。例えば、「存続の危機にあるような祭りをみんなの力で、どうやったら持続可能にできるかということを考えてみましょう」ということで、祭りの実行委員会とか、祭りを支えることに興味のある住民の皆さんに集まってもらって、そこで課題を抽出して、できる範囲でお手伝いをするみたいな感じで、小学生から高齢者まで、みんなが事前準備から当日の運営サポートみたいなところまで、やっけていくようなことができております。



国立市、秋の市民祭りであったり、さくらフェスティバルみたいな祭り、大きい祭りがあったりするんですけど、そこに何十人か人たちが集まってくるようになります。こういうことをやっけてくると、地元の企業からも注目されるようになってきて、その企業のCSRのイベントとかで、国立駅を運営されているJR中央線コミュニティデザインさんであったり、国立市にヤクルトの研究所があるんですけど、ヤクルトさんと容器をリサイクルするという、環境意識を啓発するようなワークショップにも、祭りサポーターの市民の有志の皆さんが参加して、地域の活動を支えていくっていうようなことをやっけてきております。



こういうことをやっけていくと、色々な地域の中で活動している団体がお互い、横の活動が見えるようになってくるんですね。そうすると組織は違っけていても、似たような問題意識を持っけていたりする。例えば、「こどもの居場所を考える」とか、「地域コミュニティを活性化したい」とか、「地域のビジネスを盛り上げていきたい」とかみたいな話というのもし出てきたりするわけなんですけども。そういうのを組織横断的に一緒に取り組めるようになり、住民も巻き込



みなから参加できるようになっていくことで、1つの組織だとできることは小さいかも知れないけれども、それを大きくできるのではないだろうか、そういった動きも意見交換の中で始めてくるようになってまいりました。

こういう大学っていう環境、色々な地域の団体、組織、企業、それから住民が集まりやすい、集まってみたい空間でもあったりするわけなんですけども、そういう場所を活用して、一橋大学の生みの親でもある渋沢栄一さんの理念でもある、こういう合本主義ですね。



公共を追求する、色々な資源というものを集中的に集めて事業を推進させていく。そういう考え方のもとに、地域の中でのLiving Labであり、多世代の共同参画といったものを推進していきたいというふうに考えております。ということで、今日の私からのお話になります。ありがとうございます。

来年度事業の説明

こいけ ちか
小池 智歌

内閣府政策統括官（共生・共助担当）付高齢社会対策担当
企画官



内閣府、高齢社会対策担当で企画官をしております、小池と申します。ここからは昨日3月3日から公募を開始しております、来年度の多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業について、概要を説明いたします。まず、事業の全体像についてですけれども、本事業は、地域が抱える様々な課題を、幅広い世代の住民の皆さまの力を掛け合わせて解決していく仕組み作りを目的としています。

本事業の特徴としては2点あると思っております、まず1点目が、高齢者だけではなく、若者、現役世代など多世代の地域社会への参画を目指すということ。それから2点目は、福祉など特定の分野に限定せず、分野横断的な仕組み作りを目指すということ。その2点がポイントと考えております。

背景として、我が国において急速に高齢化が進展しており、担い手不足といった課題が、地域社会では特に直面している状況にあるかと思います。一方、各種調査によりますと、活動に関心を持っているけれども、なかなか実際に参加するには至ってないという、そういう方々もいらっしゃいます。本事業は、令和6年9月に閣議決定されました高齢社会対策大綱を踏まえまして、そうした地域の多様な方々の知恵ですとか、経験、スキルを活用して、世代を超えた人のつながりを生み出すことで、地域課題や住民の皆さんの困りごとの解決につなげるプラットフォーム、仕組みを構築することを目指し、令和7年度から開始しているものでございます。

Q&A ご不明な点がございましたら、内閣府まで御連絡ください。

Q 地域課題の対策とする地域の範囲に制限はありますか？
A 本事業は基本的には原則として地域社会単位で実施を想定しておりますが、必ずしも自治体単位の事業とする必要はなく、地域の課題や住民の関心に応じて、自治体単位の事業でも実施が可能です。

Q 本事業に必要とする必要の条件はありますか？
A 令和7年度9月以降の地域社会単位（自治体単位の地域）において、地域の課題や住民の関心に応じて、自治体単位の事業でも実施が可能です。

Q タイプとエリアの幅は狭い範囲ですか？
A タイプは、幅広い世代・幅広い地域社会の課題や住民の関心に応じて、自治体単位の地域社会単位（自治体単位の地域）において、地域の課題や住民の関心に応じて、自治体単位の事業でも実施が可能です。

Q タイプA、Bどちらにも関心があるのですが、どちらにも応募することはできますか？
A 原則として応募はできません。どちらか一方の応募をお願いします。

Q 本事業について募集者の組織を行う予定がある場合は、どのような役割を担う必要があるのでしょうか？
A 本事業は自治体単位の事業であり、自治体単位の地域社会単位（自治体単位の地域）において、地域の課題や住民の関心に応じて、自治体単位の事業でも実施が可能です。

Q 募集を行うための必要書類は、全てが揃っていない場合は応募できますか？
A 本事業は自治体単位の事業であり、自治体単位の地域社会単位（自治体単位の地域）において、地域の課題や住民の関心に応じて、自治体単位の事業でも実施が可能です。

公募期間 令和6年3月3日(火)～4月6日(月)

公募に関する詳細は内閣府HPをご覧ください。
<https://www8.cao.go.jp/kourei/tasedai/index.html>

続いて来年度事業についてご説明します。お手元にお配りしているチラシをご覧ください。と思いますけれども、オンラインでご視聴いただいている方は画面に映し出されているかと思えます。こちらの事業内容のところですが、本年度は、このあとご登壇いただく全国の5つの団体が採択されておりまして、取組を進められておりますけれども、来年度は2つのタイプに分けて公募を実施することといたしました。まず左側のタイプA、マッチングタイプです。こちらは地域住民の交流促進や、地域社会との接点作り、それからマッチングの仕組みの構築を組み合わせ、幅広い層の地域住民の参画のもと、地域課題の解決に向けた仕組み作りを目指すタイプになっております。本年度の5つの団体に実施いただいておりますのは、こちらのタイプA、マッチングタイプに該当いたします。タイプAは2つの必須実施項目がございます、まず1つ目が、幅広い世代・属性の地域住民の交流促進や、地域社会との接点となる機会を創出することです。これは地域の交流拠点などの場の開設や活用、それから各世代の特徴に合わせたイベントなどの開催を通じまして、幅広い層の地域住民の交流を促し、地域社会への関心を持っていただくきっかけを作って、そしてこれから説明します2つ目の実施項目であります、マッチングの仕組みへの参加につなげていただくような取組を念頭に置いております。2つ目の必須実施項目が、地域の課題と地域の住民とのマッチングです。この地域社会への参加に関心を持つ住民と、課題・困りごとを結びつける仕組み作り、運用をお願いしたいと考えております。典型的にはボランティア・マッチングサイトのようなものがイメージしやすいかと思えますけれども、このあとの事例紹介にありますように、それにとどまらず、コーディネーターによるマッチングに力点を置いたものですか、参加しやすくするモザイク型にしたものですか、あと生活動線上の拠点やオンライン掲示板を通じて、地域課題としてまだ認知されていないけれども、住民の皆さまの困りごとといったことを拾えるような仕組み、地域の企業や教育機関とのマッチングを図るものなど、まさに地域の実情ですとか、リソースに応じた、様々なバリエーションがあると考えているところでございます。この2つの項目を必須要件とした上で、地域の実情に応じて1つ以上を選択いただく実施項目というものを下に書いてあります。チラシの③から⑨が該当いたしますけれども、人材育成の取組ですとか、デジタル技術の活用、地域の連携体制作り、自治体のポイント制度といった独自の取組との連携など、1つ以上を選択いただきまして、組み合わせさせていただいて、全体としてより効果的な取組にさせていただくことをイメージしております。

次に右側のタイプBについて説明したいと思います。こちらが、来年度より新たに設けるタイプBになっております。「人材育成タイプ」と呼んでおります。こちらはマッチングの仕組み作りの前段階として、多世代が日常的に訪れることのできる場の開設や設定、それから地域全体をコーディネートする人材の育成に重点を置いたものでして、将来的なプラットフォームの構築につなげていただくタイプになっております。ですので、将来的にはタイプAのような仕組みの構築を目指しながらも、まずはその土台となる地域住民同士の交流ですとか、地域との接点作り、人材育成に力点を置いていただくタイプとなります。タイプBは2つ、必須実施項目を設けておりまして、1つ目が幅広い世代、属性の地域住民の交流促進や、地域社会との接点として日常的に訪れることのできる機能を持つ場の設定としております。先ほど申し上げたタイプAでは「機会の創出」としておりまして、「イベントなどの開催でも良い」というふうにしておりますけれども、タイプBでは新たな拠点の開設、あるいは既存の拠点を発展させる形でも構いませんけれども、多様な属性の住民の皆さまが日常的に訪れて、そしてお互いの交流や地域への関心を育むきっかけとなる機能を持つリアルな場を、地域に設定いただければと考えております。その上でタイプBの2つ目の必須実施項目として、地域全体をコーディネートする人材の育

事業内容
 ①幅広い世代・属性の地域住民の交流促進や地域社会との接点となる機会の創出(場、イベント、活用を含む)
 ②地域の課題と地域の人材とのマッチング

タイプA (マッチングタイプ)
 ①幅広い世代・属性の地域住民の交流促進や地域社会との接点となる機会の創出(場、イベント、活用を含む)
 ②地域の課題と地域の人材とのマッチング

タイプB (人材育成タイプ)
 ①幅広い世代・属性の地域住民の交流促進や地域社会との接点となる機会の創出(場、イベント、活用を含む)
 ②地域全体をコーディネートする人材の育成、地域に定着し続ける人材の育成

事業スケジュール
 公募期間: 令和5年3月31日(土) ~ 4月30日(月)
 採択発表: 採択された団体の連絡後 ~ 令和5年5月31日

申込・問合せ先
 約稿課 政策課 経営 民生・共創担当 1F 高齢社会対策担当
 電話: 011-8222-4622

成ですとか、地域における担い手の発掘などの取組を設定しております。例えば、地域の具体的な課題解決のプロジェクトを通じたオンジョブトレーニングや、外部講師の招へいなどを通じて、今後のマッチングの仕組み作り、運用の中核を担う地域の担い手を育成する取組などを想定しております。タイプBでもタイプA同様に、選択実施項目を設定しておりますので、1つ以上を選択して組み合わせることで、全体として効果的な取組になるよう工夫していただければと考えております。なお、タイプBについては、先ほど申し上げましたとおり、将来的にマッチングの仕組みとして発展していただくような展望、計画が明確であることが要件となります。

このように来年度事業からは2つのタイプを設けておりますので、地域の実情や課題を踏まえて、いずれか1つを選択してご応募いただければ幸いです。なお本日のシンポジウムでは、Bタイプの場づくりのヒントとしまして、パネルディスカッションのあとに、地域で特色ある取組を展開されております、2つの社会福祉法人から、取組の概要をご紹介いただく予定となっております。多世代参画を生み出す仕掛けですとか工夫について、お話いただけるかと思っておりますので、様々な取組の参考になるかと思っております。ぜひお聞きいただければと思います。

続きまして応募にあたっての留意事項ですけれども、事業スキームの部分をご覧いただければと思います。本事業はNPO、地域団体、民間事業者、大学研究機関など、幅広い主体からの応募が可能となっております。複数団体による共同応募も認めているところでございます。募集の対象となる地域は、基本的には市区町村単位を想定しておりますけれども、必ずしも自治体全域である必要はありませんでして、地域の実情に応じて、自治体内の一部地域ですとか、複数の自治体にまたがる形での実施も可能としております。そして、いずれのタイプにおいても共通して求められておりますのは、事業終了後も地域で取組が継続していく展望を持つことだと考えております。そのため本事業では、応募にあたっては市区町村による認定を求めまして、例えば事業実施に係る広報周知活動ですとか、自治体内の他団体の紹介、仲介、それから自治体の保有する場所の貸与、自治体の独自の取組との連携など、自治体による協力も重要な要素と考えております。なお事業に係る経費については、内閣府からの委託事業として実施します。委託料の上限は880万円でございます。具体的な金額は採択状況等を踏まえて調整の上、決定いたしますので、ご留意いただければと思います。

また、Q&Aのところに記載しておりますが、応募にあたっては全省庁統一資格におきまして、「役務の提供等（調査・研究）」の等級を有していることが必要ですので、申請には時間を要する場合がございますので、早めの準備をお願いできればと思っております。それから公募期間は3月3日から4月6日までです。公募の詳細については内閣府のホームページに掲載しておりますので、ご確認いただければと思います。今年度の実施事業を通じまして、5つの団体の皆さまに限らず、地域において、本当にその地域のために試行錯誤しながら、いろいろな工夫を重ねられていらっしゃる方々にお会いしたところです。

本日のシンポジウムは、いろいろな地域での何か取組の参考になるものがあるかと考えておりますので、本日のシンポジウムが、応募に向けた具体的な検討ですとか、新たなつながりのきっかけになることを心より期待しております。それでは、このあとのプログラムへと進んでまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。私からの説明は以上です。ありがとうございます。

パネルディスカッション

コーディネーター 湯浅 誠 (特定非営利活動法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ 公共政策アドバイザー)

パネリスト村山 洋史 (地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 研究副部長)

パネリスト黒澤 史津乃 (一般社団法人横浜イノベーション推進機構 代表理事)

パネリスト中村 順子 (特定非営利活動法人コミュニティ・サポートセンター神戸 フォウンダー)

パネリスト光岡 眞理 (特定非営利活動法人介護予防で日本を元気にする会 理事長)

パネリスト大江 樹 (社会福祉法人三股町社会福祉協議会 研究員)

湯浅



さて、これから1時間ほど話したいと思いますけど。まずは皆さん、自己紹介がてらすね、ご活動報告を5分ずつしていただくということになっていたと思います。どうぞ。

村山

東京都健康長寿医療センターの村山がさせていただきますが、東京都健康長寿医療センターでは、事業名「『ジョブボラ』モデルによる地域活動マッチング」ということでおこなっておりまして、2023年度より板橋区社会福祉協議会と、認定NPO法人サービスグラントとともに、「ジョブボラモデル」というのを開発しまして、板橋区内のモデル地区4地域で実装をおこなってきました。「ジョブボラ」というのは、仕事の「ジョ



ブ」とボランティアの「ボラ」を組み合わせた造語で、社会参加の敷居を低くした単発・短時間・やる事が明確な仕事やボランティアを指しております。例えば町会のお祭りでは、

黒澤



横浜イノベーション推進機構の黒澤と申します。この法人はですね、まだ2年前にできたばかりの新しい法人です。これまでということで、法人のできた経緯なんかでも少しお話したいんですけども、

横浜市の中期計画に、「サーキュラーエコノミーPlus」という目標が掲げられています。これは資源循環の課題というものと、横浜市内の市民の暮らしに関する多様で複雑化した社会課題、これを掛け合わせて、持続可能でウェルビーイングな社会経済循環を作り出していこうというものです。このサーキュラーエコノミーPlusに共感して、これまで様々な分野の社会課題に、ビジネスで専門的に取り組んでいる横浜市内外の企業や人が集まって、横浜市政策経営局の共創推進チームと公民連携で、共にこのサーキュラーエコノミーPlus実現に向けた、産官学民連携のプラットフォームを作っていこうという中間支援組織になっています。昨年度は、代表の私自身が、実は、頼れる身寄りのない高齢者支援というのが専門分野ということもあって、厚労省のモデル事業を横浜市健康福祉局から受託をして、横浜市内の築50年の団地をフィールドとした、このモデル事業のほうに取り組んでまいりました。ここで感じたことというのが、やはり家族のあり方というのが、かなり多様化しておりまして、いざというとき、何かあったときの安全弁が、もはや家族ではなくなくなってしまっていると。だとしたら、誰もが老後や、その先のいざというときを含めたケアとか、人生そのもののデザインをしておくべきで、その際には、やはり支える側と支えられる側という垣根が取り払われるべきで、こういったケアや人生のデザインと、キャリアデザインというのを、同時に取り入れていかなきゃいけないだろうと考えていたところに、まさにぴったりだったのが、この内閣府の多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業だったということです。

内閣府 多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業

事業名：創・強時代のライフデザインと多世代参画の地域活力推進プラットフォームの構築（横浜イノベーション推進機構）

1. 事業開始（令和6年度）までの取組

- 令和6年3月に法人設立、同年4月より事業を本格開始
- 高齢化した団地をフィールドに、
 - 多世代交流の促進
 - 地域経済の活性化
 - 地域経済の活性化を目的とした取組を実施
- 厚生労働省「令和6年度 福利増進支援モデル事業」を受託
 - 単身高齢者の生活課題に関する相談窓口の開設
 - 支援プランの作成および支援コーディネート
 - 老後の暮らしに関する研修会・セミナーの実施

2. これまでの取組を通じて抱いた問題意識、内閣府事業に公募した理由

- 高齢者福祉に類した取組では、「変える側」を変えられる側が安定し、支援が一方的になりやすいという課題を感じていた。「支える側」が支えられ、元気のうちに準備の備えを行い、支援が必要になった後も一貫して地域で共生していく仕組みが不足している
- こうした課題を解決するためには、支援する側と支援される側という垣根をなくし、幅広い世代・層性の市民がつながり、助け合える「支え合い」の社会活動でプラットフォームの構築が必要である
- この仕組みは、継続的かつシステム的な支援を実現し、自治体、大学・研究機関、企業・団体、NPO、地域住民等の多様な主体が連携し、地域経済の向上に貢献し、持続可能な社会の実現に寄与する
- 家族形態の多様化や地域のつながりの希薄化を背景に、新たな担い手の育成と多様な主体の連携のために、誰もが自分の人生を主体的にデザインし、生き生きと行うための取組が不可欠である
- これらの課題と必要性を検証し、実証的な社会実験につなげるため、内閣府の「多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業」に公募した

3. 内閣府事業で新たに開始したこと（今年度の取組）

- 横浜15区及び市外を中心に多世代参画の地域活力推進プラットフォームを核とし、検証するための「産・官・民の体制を構築」
- 各区において、新規「アップグレード」前フェーズを中心に、区内の地域アップグレードや地区センター等が関与してきた既存の多世代交流プログラムと連携し、取組を深化
- 「サーキュラーエコノミーPlus（共生社会・循環社会・持続可能な地域経済）」の推進をテーマに、親及び子供のキャリアとケアの観点において、とりわけ高齢者や多様な主体が思いやりと多世代参画・多世代のプロジェクトを推進
- キャリアとアップグレード視点での今年度の成果を構築するためのマッピングシステムの構築に着手

写真を見ながらお聞きいただきたいんですが、私たちの取組のポイントとして、ちょっと2つ特徴的なことがあると思っています。1つ目が、フィールドが横浜市ってということなんです。横浜市って人口377万人で、日本最大の基礎自治体です。65歳以上の人口が、何と94万人。これだけで政令指定都市ができてしまいそうな。あと単身の高齢者と老老世帯、2人暮らしの高齢者、合わせて50万世帯あります。ですので、これをいっぺんに一括りでやるというのが難しいので、市があって、その下に18区があって。その市の下に3層構造という形で、ズームレンズ型というやり方で、その層に合ったいろいろなものを取り入れて、プラットフォーム化していかなくちゃいけない。

2つ目が、今申し上げた、こういうところからプラットフォームを構築していくところにあると思います。横浜は、歴史的に市民活動が非常に盛んな土地でしたので、既にこういったことに関する断片的な取組が、それぞれの地域で、実はたくさんおこなわれています、すでに。私たちはこの事業で、新たに、こうした従来型の取組に、横並びで新たに活動するというのではなくて、このズームレンズ型を意識しながらある、それぞれの断片的な、地域密着型のすばらしい取組の、相互の目線合わせをしていく。まさに市内で有機的につながる共通のプラットフォームを構築していく。そのために産官学民で共創・協働をしていくということを取組ました。これを単年度で完成させるというのは、もちろん難しいことなので、そのファーストステップが今年度だったのかなと思います。

今年度、最も力を入れたことは、多世代みんなが、自分のキャリアと人生、それから将来のケアのことを、支える側・支えられる側の垣根をなくしながら考える。こういった、このごちゃまぜマインドというのを醸成して、それを市内各所に広げていく。この取組に1番力を入れました。これだけでも、やっぱり非常に横浜市の場合、時間がかかって、地域の掘り起こしなんかも、かなり苦労いたしました。次に実際のフィールドでの取組ということで、既存の、既にやってきている取組の、それぞれの目線合わせということで、そういったところを接続、協働しながら、多世代参画の場が、こうやっていけば創出していけるということを確認していきました。特に横浜市らしいサーキュラーエコノミーPlusの概念を使って、多世代が循環社会、資源循環を意識しながら、やりがい・生きがいを見つけて、ウェルビーイングな社会経済循環に寄与していくという仕組み作りの入口に立つことができたと思っています。

3番目として、それを最終的に、全市に効率的に広げていくためのシステム構築の準備というものをしてまいりました。最後に、ちょっと気づきというところなんですけれども、やはり、この資源循環社会と共生社会の同時実現というのを抱えていくことで、やっぱり学校教育をしっかりと巻き込むことができるんですね。これ、小学校から大学まで、いろいろ巻き込んでやってきました。これが多世代の地域活力を向上させる。そして元気なときから、地域と関わりを持ち続けるという行動変容を促すことができるんだということが、気づきとしてありました。



内部用 多世代参画による地域活力プラットフォーム構築事業
事業名：個々の時代のライフデザインと多世代参画の地域活力推進プラットフォームの構築 (横浜イノベーション推進機構)

5. 今年度の事業を通しての成果・気づき

- ◆主な成果(=本事業で到達したこと)
 - 本事業は、マッチング件数や参加人数を指標とせず、多世代参画による地域活力を持続的に生み出す「拠点×プラットフォーム型の仕組み」が成立し得るかを検証する調査事業として実施した。
 - その結果、横浜市の都市構造に即した「階層プラットフォーム」(YOKOHAMAキャリア&ケア・デザインの観点)の概念設計と、事業可能性を体系的に検証することができた。
 - 各区(新横浜地区クラブラジ、宮ノ新テラス、社会福祉法人鎌倉会)や中区(BankPark YOKOHAMA)等、既存の地域資源を再評価・接続する形で多世代参画の場を形成できることを確認した。
 - 多世代交流、ライフデザイン、相談支援を同一フィールドで展開することで、「支援される側/支えられる側」ではなく、地域に参加する一員として関わる関係性が生まれることが明らかになった。
- ◆得られた気づき(=仕組みとして見てきた本質)
 - 多世代参画による地域活力創出には、単一拠点や単一制度ではなく、都市規模や地域特性に応じて調整を要する「ズームレンズ型プラットフォーム」構築が有効である。
 - ライフデザイン(経済・生活・多老)を起点とすることで、「困ってからの相談する」支援ではなく、元気なうちから地域と関わり続ける行動変容を促せることが確認された。
 - 「ポテンシャル」有効活動、教育/社会参加といった従来分断されていた領域を横断的に捉えることで、担い手不足のものにアプローチできる可能性が顕著化した。
 - 地域社会システムとの接点を、自治体、大企業・研究機関、企業、NPO、地域住民が横やかにつながることで、地域循環経済と共生社会を同時に成立させる基盤要件を抽出できた。
- ◆今後に向けて(=次年度以降への展開可能性)
 - 本年度の調査・実証を通じて、横浜市の規模に即する「社会活動マッチングプラットフォーム」の要件を整理・抽出することができつつある。
 - 次年度以降は、YOKOHAMAキャリア&ケア・デザインの拠点を核とした多様な主な(担い手)のネットワークの構築と、マッチングシステムの社会実装フェーズへの移行を促せる。
 - 本事業は、経済圏が広がる「サーキュラーエコノミーPlus」の実践モデルとして、在来地域・他分野への横展開が可能な多世代参画型の社会インフラと発展する可能性を有している。

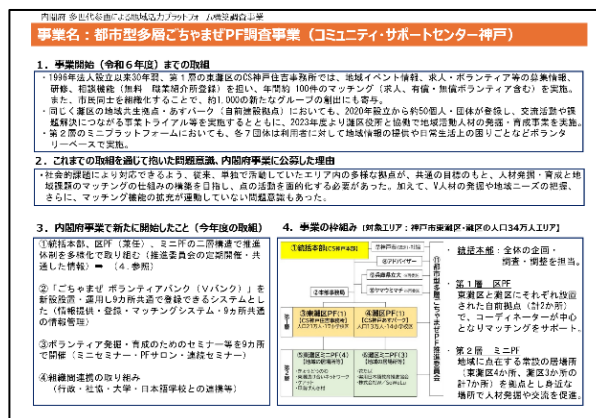
今後なんですけれども、この横浜市のような大規模都市に耐えうる、特にボランティアと就労の境界線の整理なんかも、これからの課題だと思っていますけれども、これが社会活動に、多世代が持続的な、可能な形で関わることで、地域活力を向上できるんだという要件を整理する。そういった道筋が見えてきたところなので、今年度こうやって見えてきたものを、そして醸成してきたこのマインドを、来年度以降もしっかりと育ててまいりたいというふうに思っています。以上です。ありがとうございました。

山村



コミュニティサポートセンター神戸、CS神戸の山村と申します。私たちは阪神淡路大震災をきっかけに立ち上がった、民設民営の中間支援のNPOになります。NPO等のゼロから立ち上げ、そしてボランティア仲間を増やすというところに注力をして活動をしています。震災からの復興の過程で、1団体でするのではなくて、ネットワークで取り組むということの重要性を非常に痛感いたしましたので、今回のこの事業も、9団体、9拠点のネットワークで進めてまいりました。私たちがエリアとしているのは、神戸市の東灘区・灘区と言って、最も大阪寄りの人口34万人のエリアになります。

右下の図をご覧ください。1層目が区のプラットフォーム。これはCS神戸の拠点になります。2層目がミニプラットフォーム。これは地域の常設居場所7か所の皆様にご協力をいただいて、活動を進めてまいりました。これまでも、それぞれは点としての活動はしていたのですが、面になることで、よりたくさんのボランティアの皆さんに出会えるのではないかと思います、今回応募させていただきました。その活動の根幹となるのが、ごちゃまぜボランティアバンク、Vバンクといって、ボランティアをしたいという個人の方と、ボランティアを探している団体の方に、双方に登録いただいて、マッチングをするという仕組みになります。



こちらが区プラットフォーム、ミニプラットフォーム。全部で9か所のコーディネーターの皆さんと、それから各拠点の様子になります。

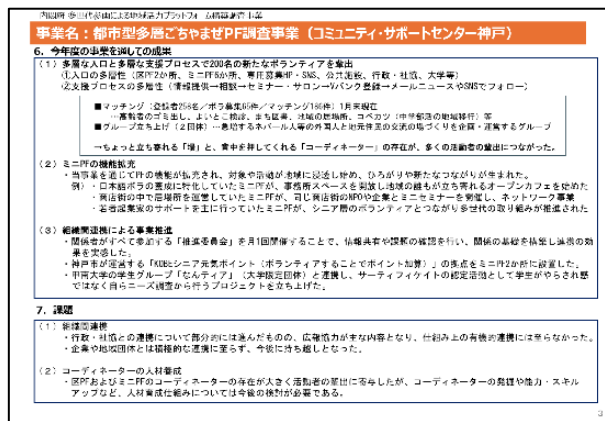
私たちの成果として3点を挙げております。まず1つ目に、多層な入口と多層な支援プロセスを用意することで、1月末時点で186人の新しいボランティアの方に出会うことができました。まず、入口が多層であるということがあります。

区プラットフォームが2か所、ミニプラットフォーム、常設居場所が7か所、そこから入ってくることもできますし、あるいは専用のホームページ、SNS等、入口が多かったということが良かったのかなと思いますし。また支援プロセスも、それぞれの9拠点において、ボランティアに関する情報提供から始まって、相談に乗る、セミナーやサロンのお誘いをする、Vバンクの登録をおすすめする。そのようなたくさんの方の支援をする中で、どこからでも入ってこれるという状況が良かったのかなというふうに思っております。

結果、1月末現在で186人の新しいボランティアの方に出会えたこと。そしてグループの立ち上げにつきましても、ゼロからの立ち上げが2団体。これは地域で急増している外国人の方と、地域住民の方が交流できる居場所を作りました。そしてたくさんの方が、そこでボランティアをしていただいています。これらからは、ちょっと立ち寄れる場、区プラットフォームやミニプラットフォームのような拠点と、ぼんやり何かしたいなって思ってる人がいたときに、ちょっとだけ背中を押してくれるコーディネーターの存在というのが、たくさんの方のボランティアさんを作るために必要なのかなというふうに感じています。

そして2点目にミニプラットフォーム、地域の常設居場所の機能が拡充したということも、成果というふうに考えています。例えば、これまでは日本語ボランティアの養成に特化して活動をされていたミニプラットフォームさんが、「誰でも来て良いよ」という居場所を始めてくださったりとか。あとは、ミニプラットフォームで出会った若いママたち同士で、地域課題に対応するようなプロジェクトを立ち上げたというように、今はミニプラットフォームが、地域のボランティア創出のハブのような機能を果たしつつあると。これも大きな成果だったというふうに思います。

そして3点目。色々な組織と組織間連携をすることができました。まず内閣府の方を含め、すべての参加者が参加する推進委員会、これを月1回開催して、どうしたらボランティアさんが増えるか？ということについて、前向きな意見交換をしながら進めてきました。それから神戸市さんとは、KOBEシニア元気ポイントのステーションにいくつかのミニプラットフォームさんがなったということ。それから大学は、近所の甲南大学さんと、単位が取れる活動として、学生さんがミニプラットフォームで、地域調査からして、プロジェクトを立ち上げるという取組も始まってきております。最後に課題としましては、組織間連携がまだまだこれからということと、あと「場とコーディネーター」というお話をしましたけれども、コーディネーターのスキルアップ、ここは大きな課題だなというふうに思っております。今



回、内閣府さんに応援をいただいたことで、新しく約200人のボランティアの方に出会うことができましたことを、一同、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

光岡



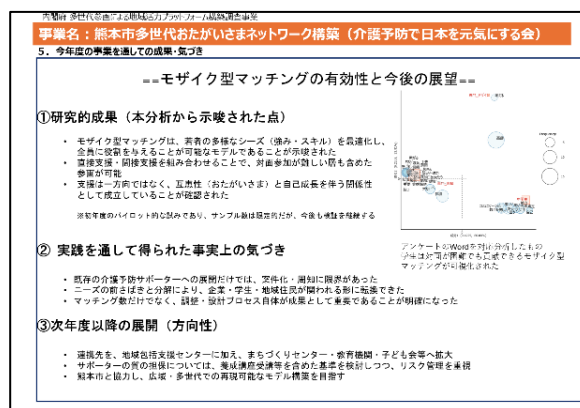
熊本市多世代おたがいさまネットワーク構築のNPO法人介護予防で日本を元気にする会でございます。

これまでの取組として、私どもは、令和3年から熊本市から介護予防サポーターの育成事業を受託してまいりました。令和5年の10月からは、熊本市福祉課や地域包括支援センターと連携しまして、通いの場や生活支援のニーズと介護予防サポーターをマッチングするという取組を試行してきました。令和6年10月からは、そのマッチング・システムの本格的な施行に入っております。

そしてここで、活動をつづけていく中でですね、いくつかの課題が見えてきました。まず介護予防サポーターの高齢化です。ここが進んできまして、若い担い手の確保が急務になってまいりました。また、現場のニーズをうまく吸い上げられず、新規案件の掘り起こしや調整コストが増大してきました。さらに、介護予防サポーター以外の多様な担い手を発掘する必要性も強く感じてまいりました。こうした課題を解決するために、内閣府のこの多世代参画による地域活力プラットフォーム構築調査事業に応募しまして、採択いただいたということでございます。今年度の新たな取組としては、一番力を入れましたのは「モザイク型マッチング」ということで、地域ニーズの仮置き場ですね。この「ちょっとよかるかポスト」というものを設けまして、気軽にニーズを書き込める場を作り、前さばき・整理した上でマッチングにつなげる、こういった仕組みを作ってまいりました。具体的な取組をご紹介します。

| 事業名：熊本市多世代おたがいさまネットワーク構築（介護予防で日本を元気にする会） | |
|--|--|
| 1. 事業開始（令和6年度）までの取組 | <ul style="list-style-type: none"> 令和3年より、熊本市の介護予防サポーターの育成事業を受託。 サポーターの活躍の場を広げるため、令和5年10月より令和7年3月まで、熊本市福祉課や地域包括支援センターと連携し、「通いの場」や「生活支援」のニーズと介護予防サポーターをマッチングする取組（地域資源マッチング）を試行的に開始。 令和6年10月から、マッチングシステムを運用。 |
| 2. これまでの取組を通じて抱いた課題意識、内閣府事業に公称した理由 | <ul style="list-style-type: none"> 介護予防サポーターの高齢化に伴い、若い世代の担い手確保が課題。内閣府事業により、介護予防サポーターの若い手を多世代に広げ、地域の担い手不足の解消を図る必要があった。また、介護予防サポーター以外の若い手確保の必要性も認識。 生活支援コーディネーターからのニーズがうまく吸い上げられず、新規案件の掘り起こしや調整コストの増大が課題となっていた。 個別の生活支援ニーズに対するサポーターの質の担保は、地域包括支援センター等、ニーズを拾い上げる立場にとって最も重要な課題である。しかし介護予防サポーター養成講座を必須とすれば効果は低く、ニーズに対する丁寧な対応はマッチングコーディネーターの力量が必要となる。 介護予防サポーターだけでは対応できない困り事についても、広く受け付けてニーズの見える化を図りたい。 |
| 3. 内閣府事業で新たに開始したこと（今年度の取組） | <ul style="list-style-type: none"> これまで運用していた「マッチングシステム」に「モザイク型マッチング」機能を追加的に開発 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 地域ニーズの位置を補完し、ニーズ発起者が「気軽に」書き込める場を提供（ちょっとよかるかポスト） ▶ 地域ニーズの事前整理プロセスを導入し、ニーズの背景整理、区分け、マッチング準備を実施 <ul style="list-style-type: none"> ⇒ マッチング可能なニーズとしてシステムに登録 ⇒ 受け手の明確化（ちょっとよかるかポストからの情報整理し、一発公開） ▶ 地域包括支援センター等の協力を得て、マッチング取組等のための ▶ 熊本おたがいさま大学（スモアライフ学園）の施設、若年層の参加が見込まれるイベントを実施し、多世代交流を促進 ニーズを踏まえて、企業等と連携し、積極的に案件を形成 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 専門知識を持つ学生の活用（研修や指導、デザイン制作） ▶ 企業（ローソン）と連携した買い物支援の試行 ▶ 外国人居住向け生活・交通ルールの多言語動画制作を企画 |

まず左上ですけれども、ローソンさんですね。移動販売を活用しまして、体操・交流・買い物支援、これを組み合わせたイベント型の支援をおこないました。個別の訪問よりもハードルを下げながら、外出促進、見守り、多世代交流、これを同時に実現した取組でございます。次にその下ですけれども、熊本デザイン専門学校さんが制作した動画に合わせまして、中学生がMCを務めながら進行するワークショップを開催しました。12月の3日のイベントには、高齢者、中学生、それぞれ15名が参加しまして、世代を超えた交流が生まれました。また右上です。こちらは熊本市北区が抱える地域課題の取組でございます。北区には、担い手の確保、それから子ども・高齢者の見守り、そして外国人との共生という、この3つの大きな課題があります。外国人住民の方々は、文化の違いから地域になじみにくいという現状がございます。現在、崇城大学さん、それからスタディライフグループさん、そして寺尾病院さん、こういったところが連携していただきまして、生活・交通ルールを多言語に翻訳した動画を、制作中でございます。大学、企業、病院がそれぞれの強みを持ち寄ったこの取組は、まさにモザイク型マッチングの形といえようかと思えます。つづいて下のほう、歯科衛生士を目指す学生と、現役の歯科衛生士の先生が協力し、通いの場での口腔ケア講話や、歯磨き指導を実現いたしました。専門知識を持つ学生が、地域の高齢者に直接貢献できる場を作るということは、大きな成果でございました。そして最後に右下です。高齢化が進む介護予防サポーターと申し上げましたけれども、やはり長年培った経験や得意なことを活かして、精力的に活動されている方々が、やはりたくさんいらっしゃいます。「高齢だから支えられる側」ではなく、豊かな経験を持つ担い手として地域で輝いていただけることも、この事業の大切な側面でございます。



今年度の分析から3つの成果が見えてきました。まずモザイク型マッチングというのは、若者の多様なスキルを生かしながら、全員に役割を与えられるモデルであるということが示されました。対面が難しい学生も、間接支援や動画制作という形で参画できるということが可視化されました。

次に実践からの気づきとして、ニーズを前さばきして分解することで、企業、学校、地域住民が関われる形に転換できるということがわかりました。マッチングの件数だけではなく、調整ですとか、設計、このプロセス自体が重要な成果だという認識も深まりました。そして次年度以降の展開としましては、連携先を地域包括支援センターだけではなく、まちづくりセンター、それから教育機関、そして子ども会などへ広げていきたいというふうに考えております。熊本市と連携しながら、広域・多世代で再現可能なモデルの構築を目指してまいります。最後になりますが、「おたがいさま」の精神のもと、高齢者も、若者も、企業も、学校も、それぞれの強みを持ち寄れる地域をつくる。これが私たちの目指す姿でございます。ありがとうございました。



宮崎県にある三股町社会福祉協議会の大江と申します。私はですね、三股町社協の中にある、コミュニティデザインラボっていう部署の研究員です。

コミュラボは「自分たちのまちを自分たちで楽しく」というフレーズをコンセプトに、日々いろいろ活動している部署となっております。ちょっとイントネーションが聞きなれないと思うんですけど、耳を傾けていただければと思います。私たちがこの事業を取ってまず考えたのは、マッチングを地域でどうやって生み出していくかっていうことでした。

マッチングは、一般的には、ニーズが表出されて成立されるものだと思うんですけど、地域の中には、自分のニーズというのがわからなかったり、うまく表に出せない人もたくさんいると思ったので、お節介的視点で、誰かのニーズを見立てたり、くみ取ったりする必要があるかなと思い、「お節介にもほどがある!!」という名前のプロジェクトで本事業を進めていくことにしました。お節介を促進するためにやったのは、大きく2つありまして、1つはお節介掲示板というものです。

これが実際の掲示板なんですけれども、ここには、地域の人たちのつぶやきとか、つぶやきを聞いた拠点の人の書き込みがされていくんですけども、この掲示板は、地域の生活動線上のあらゆるところに置いてみました。

例えば、コンビニとか、ガソリンスタンドとか、チョコレート屋さんとか、古着屋さんとか、色々なところに置いてみたんですけど。そこで実際に出了つぶやきとしては、「カラオケをやりたい」とか、「初恋の人をちょっと探してる」みたいなのか。あとは、「うちの米がおいしいんだけど誰かに食べてほしい」とか。あとは、「このコンビニの何々ちゃん大好き」みたいな。色々な、多種多様なつぶやきを拾える掲示板になりました。

もう1つやったのは、お節介百人一首会議とい

内閣府 多岐目的地域における社会的な場づくり事業(三股町社会福祉協議会)

事業名：地域における社会的な場づくり事業（三股町社会福祉協議会）

1. 事業開始（令和6年度）までの取組

- これまで「場づくり」に関連する事業を比較検討。
 - 生活支援型施設運営：移動支援や地域の居場所、交流型事業など居住単体の地域活動を100事業程度出して付定。
 - 社会福祉法人施設運営等：地域の心豊かな多機能型「居場所型」のスタートアップを支援。
 - 地域力強化推進モデル事業（住居生活支援を地域に活かしていくフレームである「コミュニティデザインラボ」を立ち上げ。
 - 駅前活性化事業（地域の居場所トータルコーディネート）：「ふる学校」等多様な場づくりを地域においても展開。

2. これまでの取組を通じて得た課題意識、内閣府事業に公募した理由

多様な名称が「つながり」を目的とした居場所づくりやつながりづくりを目的として事業を展開しているが、一人暮らし高齢者の居場所や認知症高齢者の居場所など「多目的な場づくり」が多かった。地域の住民目線に立ち、人々が出会う可能性が高い「生活動線上の場づくり」という新しいアプローチにチャレンジする必要がある。

従来の事業は、「課題」や「支援」の解決策という形が中心だったが、出ている人は自分がない、出ていると思えない、やりたいという声はあっても受け取れないと感じ、「おまつかい」という概念を導入、ニーズになる前の思いを把握して、プロジェクトをおこなすという発想の転換が必要だった。

3. 内閣府事業で新たに開始したこと（今年度の取組）

- 日常生活動線上の場を「おまつかい」が飛び交う場に設定。テスト的に数カ所には物置を新設。
- 地域活動の「おまつかい」もつなげ・ゆるゆる」を促進。
- 「場づくりサークル」の開催。
- 百人一首会議の開催。
- 地域活動が受け取れるように、プロジェクトをデジタル化。

内閣府 多岐目的地域における社会的な場づくり事業(三股町社会福祉協議会)

事業名：地域における社会的な場づくり事業（三股町社会福祉協議会）

4. 取組の様子（写真）

うもので。これ何かっていうと、さっきの掲示板で出た1つ1つのつぶやきを札にして、「その札同士を掛け合わせることで、一句読んでください」という取組なんですけど。実際、詠まれた句でいうと、「うちの寺にはカラオケをする設備がある」という札と、「カラオケをしたい」とか、「歌が歌いたい」「韓国語で歌いたい」みたいな札を掛け合わせて、お寺でカラオケをする「テラカラ」というプロジェクトが生まれたりして。つい先週の土曜日に、その活動をやったりもしました。これは地域の人が、実際、札を組み合わせてできたプロジェクトなので、地域の人が主体的に考えて、取り組めるような活動にもなっていたと思います。こういう掲示板みたいなことをすることで、つぶやきが可視化されて、私たちもすごく共有しやすくなりましたし、地域の人が自分で書けなくても、拠点の人が見立てて書くみたいなこともできるので、これまで以上に声が出せなかった人たちのニーズも、くみ取るようなことができるようになったかなと思います。

また掲示板の上でも、「うちのおいしいお米、食べてほしい」というつぶやきに対して、「そのお米買わせてくれ!」みたいな、掲示板の中での交流も生まれたりしました。また、お節介百人一首会議では、1つ1つのつぶやきをカードにしたので、なんだろうな……組み合わせとかを、すごく目で見て考えられるので、これまで以上に考えやすくなりましたし、パターンとかも結構、今までにないような組み合わせもできるような取組になったんじゃないかなと思っています。とはいえ、まだ荒削りな取組でもあるので、次年度以降はこの活動をもっとブラッシュアップしつつ、他地域でも展開できるようにしていきたいと考えているところです。以上です。

湯浅

今日のご参加の皆さんが、この事業に関心があって、来年度に向けてのエントリーを、昨日から受け付けが始まったということなんですけど、考えている人たちが少なくないであろう。そして、皆さんはすでに採択されている団体ですので、「どういうことをやったら採択されるんだ?」「いや、こういうことをやれば良いんです」ということですね。なので、私が申請を考えている人目線で、ちょっと疑問点を聞いていきますので、皆さんの取組から、そこにあたるものをご紹介いただきたいなと思います。

「何に引っかかるかなあ?」というふう考えたときに、「何これ?」と思うなと思ったのは、「ごちゃまぜ」です。聞いたことある人は聞いたことあるかもしれないけど、聞いたことない人は聞いたことない。これは一体何を指して、「ごちゃまぜってなんだ?」。

「ごちゃまぜのつながりを通じて」とって、今日のタイトルのサブにも書いてありますけどね。このごちゃまぜってなんだ?ごちゃまぜとかけて、我がまちと解く。その心は?いや、別に大喜利にしなくて良いです。ごちゃまぜとは何でしょう?まず、皆さんのそれぞれの解釈を。「自分はこう読み解いたよ」という。

黒澤

パッと思いつくのは、自分がずっとやってきたこととも関わりがあるんですけど、多世代というところもありますけど、支える側と支えられる側というのが境界なく、行き来するよう。そういったイメージ、固定されないというのを思いました。

湯浅

なるほど。多世代ということに加えて、支える・支えられるが固定化されない。支え合うみたいな感じですね。固定化しない。

黒澤

そうですね。あるときは支える側になり、あるときは支えられる側になり、いつあっちに行

くか、戻ってくるか。そこが自由で固定しない。

中村

ごちゃまぜという意味が、日本の社会の企業さんだとか、行政さんだとかを見ると、みんな同じ価値の方々がコミュニティを形成している、組織を形成している。けれども、地域社会というのは、本当に背景から、年代から、性別から、国籍から、あらゆる人たちがいる場ですよね。この状況を、ごちゃまぜというふうに解釈いたします。

湯浅

職場も学校も、割と年齢も揃っているし、ある程度同じような大学の出身とか、そんなふうなことで同質的な空間だけど、地域は多様であると、ごちゃまぜであると。中村さんはごちゃまぜと聞くと、地域をイメージする。そういう感じですか？

中村

たぶんそうです。地域を……ある小学校区であり、中学校区であり、自分の生活圏域の中の地域を想像いたしますね。

湯浅

ありがとうございます。

村山

性別とか年齢みたいな、傍目から分かるような、そういう多様性というところもあると思うんですが。先ほどの黒澤さんの意見とすごい似てるんですけども、ニーズとか言うんですけども、さっき、支える・支えられる側と言ってましたけど、もっともっと未熟な部分って言いますか。例えば、もっと「自分はこういうことができるんだ」とか。先ほどの三股町の百人一首とも通ずる部分があるかもしれませんけど、誰かが「それっておもしろいですよね」とか。「それは自分のところでもやってほしい」みたいな。支える・支えられるとかじゃなくて、それぞれのエゴであったりとか、なんか、人に知らせたいっていう気持ちとかが、上手いことガッチャンコするといいますか。つながるようなことが起これば、それはごちゃまぜになった状態と言えるなと思います。さっき、一番初めに言いましたが、傍目から見えるような多様性もあれば、もっと中身の部分の多様性というのも備わっているところが、ごちゃまぜ社会というか。

湯浅

なるほど。世代が多様とか、分野が多様というだけじゃなくて、ニーズとシーズみたいな、ニーズになりきれないつぶやきみたいなのも拾えるっていうか、扱えるっていうか。

村山

たくさん、そこら辺にふわふわ浮いてる状態っていうのが、ごちゃまぜかなと。

湯浅

ありがとうございます。

光岡

私は長年、担い手の育成というのに携わってきて、その担い手さんというのは、例えば、サ

ポーターの養成講座という平日の昼間なので、どうしても高齢の方しか来られないわけです。担い手って今まではずっと、リタイアされた高齢者の方というふうに固定観念がありました。なのですが、この事業に参画をしたことで、もっと視野が広がったというか。それこそ、ごちゃまぜじゃないと、これはうまくいかないんだなというふうに背中押しをされたとか、とても思っています。結局、ごちゃまぜってどういうことかということ、地域を良くしたいとか、地域の課題を解決したいというのは、その地域の団体、学校、病院、どんなところでも……企業さんもですね、同じ意識じゃないですか。その同じ意識に向かっている団体でも、人でも、個人でもそうですけど、そういった方がごちゃまぜで。そのごちゃまぜの方たちが同じゴールというか、目的に向かっているという構図をごちゃまぜというふうに考えます。

湯浅

色々な人たちが地域を良くしたいと思っている。そこは一緒だけど、そこに色々な人たちがいて、その人たちがそれぞれ山登りしてるみたい。それがごちゃまぜな山登りみたい、そんな感じですか？

光岡

そうですね、まさに。

湯浅

ありがとうございます。

大江

ごちゃまぜって言われて思いついたのは3つあって。「老若男女」という言葉と、あとは、最近行った「オーガニックフェス」っていうお祭りのことと、「チャーハン」を思い出したんですけど。老若男女というのは、ごちゃまぜっていうか、種類みたいなイメージで思いついて。種類って言ったら、言葉が良くないかもしれないんですけど。

最近オーガニックフェスタっていう地元のお祭りに行ったんですけど、それはオーガニックをタッチポイントに開催されたお祭りだったんですけど。見るからにオーガニックっぽい人もいれば、全然関係ないブランドみたいな感じの人もいれば、スーツの人もいれば、全然関係ない人たちもいれば、そういう色々な人たちがいたけど、たぶんオーガニックの人に影響されて、オーガニックじゃない人も裸足になったりとかしてるのを見て、「なんかごちゃまぜだな」と思ったのを思い出したというのと。チャーハンも、ごちゃまぜだなと思ったという感じです。

湯浅

老若男女は、まあ分かるわね。年齢とかジェンダーとかがいろいろですと。オーガニックフェスは、なんかオーガニックフェスだから、同じようなオーガニック好きが集まるのかと思いきや、オーガニック好きも来れば、なんかそうじゃなさそうな人もいます。

大江

そうですね。私もオーガニックじゃないというか、そんなに意識してないんですけど、お祭りっていうだけで、「ちょっとおもしろそう」で行ってみたところはあったりして。

湯浅

そのときの、オーガニックフェスの現場の雰囲気は、まさにごちゃまぜって感じだったん

だ。

大江

ごちゃまぜって感じだったなって思って、思い出したりしました。

湯浅

あとチャーハンは、何チャーハン？

大江

ああ、私の母が作るチャーハンは、何でも入ってるんですよ。

湯浅

五目なんだね。

大江

五目かもしれないですね。

湯浅

それで、ごちゃまぜ。

大江

はい。

湯浅

安心しました。ありがとうございます。ということで、お聞きの皆さま、これぐらいの皆さんぐらいの、ごちゃまぜの解像度があると、採択されるらしいです。次に疑問に思いそうなところで、私の勝手な推測ですけどね、来年度の事業募集。タイプAとBがあります。今日お集まりのこの皆さんは、初年度だからこのように分かれてませんでした。でもタイプAに該当すると思います。タイプAで、それぞれ全国の現場の皆さんは、それぞれ色々なことをやっていらっしゃるわけですね。こういう時に思うことの1つは、私も応募する側になるといつも思うのですが、すでに今やってる、自分たちがやってることが、いろいろあります。これで良いのか？これに加えて、もうちょっと何かやんなきゃいけないのか？ここで想定されている、求められているハードルというのは、どのくらいなのかみたいなのが、いつも分からなくて申請のときに困っている。

それで皆さんが今取り組んでいることを、ぜひ聞かせてもらえればと思います。まず必須事項項目の1。「幅広い世代・属性の地域住民の交流促進や地域社会との接点となる機会の創出（「場」の開設や活用を含む）」。例として、「多世代が参加し、新たなつながりが生まれるイベントの実施」。もう1つは「多様な主体が参画し、地域について話し合うワークショップの実施」。普通どこでもフェス的なことはやっていますね。社会福祉フェスタとか。やっていない自治体の方が珍しい。あるいはワークショップ。住民さんが来て、時々課題は違うでしょうけど、ワークショップを色々な形でやっていますよね。それで良いんですかね？あるいは、「これに加えて何かこんなこと」なのか。皆さんは、この1番にあたって何をやりました？というのを教えてください。